

貨幣は価値尺度ではない

富 塚 文太郎

経済学では、商品の価値尺度は貨幣である、あるいは、貨幣の機能の第一（少なくともその機能の重要なひとつ）は商品の価値尺度である、と長らく考えられてきた。しかし、そのような貨幣の機能は現代の紙幣性の下では完全に否定されるし、さらにかつての金本位制の下でもそうした機能は存在しなかった。私はそのことを先に「貨幣は価値尺度か」¹⁾と題する一論で論じたが、そこには一部、論理の不徹底性と、そのことに基づく誤りも含まれていた。本稿はこの前論文を敷衍し、かつ修正するものである。併せて、それに関連して、現代の経済学に大きな影響力を持つワルラスの交換価値と価格の理論の誤りを指摘しておく。

1. 紙幣制下での価値尺度問題

こんにち、商品の価値尺度の問題を検証する上での決定的問題の一つは次の点にある。すなわち、世界的に金本位制および金貨流通が最終的に消滅した 1930 年代以降の世界各国の貨幣制度、すなわち全面的な紙幣（中央銀行紙幣）流通の下で、果たして貨幣（以下、金をもって代表させる）が価値尺度であることを論証できるか、を問うことである。

金が価値尺度であるということは、①それぞれの商品の交換価値が金の量で（グラムなどの質量名で）評価、表され、②その金は金の一定量（例えば 1500 ミリグラム = 1.5 グラム）を単位とする貨幣名（例えば 1 円）で表される、③したがって、商品の交換価値はそのような貨幣名の倍数による価格（例えば〇〇円）として表される、ということである。このうち、①は金の「価値尺度としての機能」、②は金の「価格の度量基準」としての機能と呼ばれてきた。

金貨流通の下では、金貨（例えば 1 円金貨）そのものが一定の金の量（例えば 1500 ミリグラム）を明示していたから、価格 10 円の商品 Y の交換価値は金 15 グラム（1 円金貨の 10 個）に等しいと考えることが容易であった。また、金貨の流通がほとんどなくても、銀行券（中央銀行券）の金との兌換（だかん。固定比率での金への交換）が行われていれば、10 円の銀行券による商品価格の支払いは、10 円の金貨による支払と同じと理解でき、したがって金が価値尺度として機能していると理解することも容易だった。

ところが、金貨の流通も、銀行券の金兌換もなくなった現代の紙幣制の下では、固定的な価格基準が存在しない（貨幣 1 単位、例えば 1 円が幾ばくの量を指すが明かでない）た

貨幣は価値尺度ではない

めに、ある価格（例えば10円）の商品Yの交換価値がどれだけの量の金に等しいかを知ることができない。すなわち、商品Yの交換価値をある量の金と等しいと見なすこと、いいかえれば、金を価値尺度としてみるることができないということである。それにもかかわらず、商品Yに10円というような具体的な価格がついているということは、商品の価格が金（という価値尺度）抜きで決まっていること、したがって金は価値尺度ではない、そういうものとしては機能していないことを実証している。

ところで、以上のような現代紙幣制下の価値尺度問題を考えるに際し、誤った理解を起こさせるような事実があったし、現在もあることに注意したい。それは以下のようなことである。

その一つはドルの金平価と対外交換性に関するものである。アメリカは1933年にドルの金との兌換を停止したが、34年にドルの平価（1ドルあたりの金の量）を約41%切り下げた（注）あと、1936年から条件付きではあるが、外国通貨当局に対して、その当局がアメリカにおいて保有するドル（ドル残高, Dollar Balance）を、金1オンス=35ドルの割合で金に交換することを認めたのである（これをドルの対外交換性という）。

注）兌換停止までのドルの平価は1ドル=純金23.22グレイン、その逆数である金価格は金1トロイオンス=20.67ドルだった。切り下げ後は1ドル=純金13.71グレイン、金1オンス=35ドルとした。なお、トロイ衡では、1オンス=480グレイン、1グレイン=24カラット。グラム換算では1トロイオンス=31.104グラム、1グレイン=0.0648グラムである²⁾。

このドルの平価と対外交換性は、第2次大戦後のIMF体制下の固定為替相場システムにおいて要（かなめ）の役割を果たした。すなわちこのシステムにおいては、IMF加盟国はその国の平価（Par Value）を「共通尺度（Common Denominator）である金により、または1944年7月1日現在の量目および純分を有する合衆国ドルにより」表示すべき旨規定された（IMF原協定第4条第1項）。ここで指定されたドルは、ブレトン・ウッズ会議開催時のドルで、1934年に決定された平価のドルと同じである。実際には日本を含む大多数の加盟国は、例えば1ドル=360円（為替平価）というように、その国の貨幣（通貨と表現されることが多い）の平価をドルで表示した。しかし、そのドルの金内容が決まっていたから、各国通貨の平価は間接的に金で表示されている、と見なすこともできたわけである。そして各加盟国は、為替平価を維持するために為替市場で外国為替の売買操作を行うのであるが、当時の国際通貨は主としてドルであったから、介入操作で売買される外貨は主としてドルであった。その結果、加盟国の国際収支に応じて、各加盟国通貨当局が保有するドルが減ったり増えたりする。ある国のドル保有が減少してドル不足に陥ったときには、短期融資機関としてのIMFなどがドルを供給する。その逆に、ある国が黒字続きでドル保有が増加の一途をたどる

ような場合には、累積するドル保有に伴う為替リスクを回避するために、アメリカに請求してそのドルを金に交換できた。この場合、アメリカの金保有は減少し、それがアメリカの国際収支赤字を抑制する効果を生み、したがってドル平価を維持することを可能にする。以上が IMF 体制下の固定為替相場システムの機能の仕方であり、このシステムにおいてドルとその対外交換性が果たす役割であった³⁾。

このようなドルを要とする固定為替相場システムはしばしば金ドル体制と呼ばれたし、さらにロバート・トリフィンなどはそれを「金為替本位制」と呼んで、この体制を一種の金本位制とみなした⁴⁾。

しかし、IMF 体制下の固定為替相場制を支えたドルの平価及び金との交換性は、あくまで対外的なものであり、アメリカ国民がその平価（逆にいえば金の固定価格）でドルを金に交換できたわけではなかった。またアメリカ以外の多くの加盟国は、自国通貨の平価を対ドル平価を介して金と結びつけていたといえるが、それぞれの国内で自国通貨の金への交換を認めていたわけではない。したがって、それぞれの商品の交換価値がある量の金に等しいということはどこにも示されなかった。それにしても、トリフィンがこの金ドル体制を金為替本位制と呼んだことに見られるように、このようなシステムの存在が、金が価値尺度であるとの考え方にとってのひとつの支えとなったことは事実である。

現代紙幣制下の価値尺度問題を考えるに際し、問題の誤った理解を招きかねないもう一つの事実は、各国における金の自由市場の存在と発展である。金 1 オンス = 35 ドルの比率でのドルの対外交換性は、アメリカからの金流出が続いたあと、1971 年 8 月にニクソン米大統領によって停止され、先進主要諸国の為替相場は曲折を経て 73 年 3 月から変動相場制に移行した。さらに 76 年 1 月の JMF 暫定委員会の合意を経て 78 年 4 月に IMF 協定の改正が行われ、①金の公定価格の廃止、②為替平価の基準として金を用いることの廃止、③ IMF 所有の金の 1/3 の処分（1/6 は市場へ売却）、④新しい IMF における計算単位および平価の表示単位として SDR（IMF の特別引き出し権で、通貨バスケット）の採用などが決定され、IMF 体制から金がいわば追放された。これは一般に金の廃貨（貨幣としての機能の廃止）と呼ばれる。

しかし、以上のような経過の結果として、通貨当局による金保有の必要度あるいは意欲が低下したこと及び民間の金保有と取引の自由化が進んだことは、金の自由市場の発展を促すことになり、そこでの自由な相場（変動する）の形成を促進した。金に対する民間の主な需要は、産業用、インフレ・ヘッジを目的とする投資的退蔵、値上がり期待の投機的退蔵である。ところで、このような金の民間取引の活発化は、固定相場によるものではないにせよ、金本位制下で行われていた銀行券の金兌換の事実上の復活ではないか？これが金廃貨論に対する価値尺度機能存続説からの異論である。つまり、市場で金が自由に売買され、金の価格（貨幣単位あたりの金量の逆数）が形成されている（絶えず変動しているが）ことは、まがりなりにも金が価格の度量基準として機能していることを示すものであるとの解釈⁵⁾、したが

貨幣は価値尺度ではない

って商品の現実の価格（貨幣名表示）はその商品の等価である金の量を表しているとの解釈が生まれたのである。

ところで、現実の金価格はいちじるしく変動的であり、しばしば短期間に大幅に上昇する。例えば、今日の代表的な金市場であるロンドン市場での金現物相場は、1996年12月（平均）の1トロイオンス＝369ドルから2000年12月の271.59ドルへ下落した後、05年12月には510.1ドルへ、さらに07年9月末には743ドルへ急上昇している（東洋経済・統計月報各号による）。2000年12月から05年12月までの上昇率だけでも88%である。他方で、金を価値尺度及び価格基準と見なす理論に基づくと、商品と金の生産条件が大きく変化するのでないかぎり、価格基準の低下（貨幣1単位あたりの金量の減少、すなわち金価格の上昇）は、それに応じた物価水準の上昇をもたらすはずである。しかし例えばアメリカの消費者物価指数は、金価格が88%も上った上記の期間にほぼ対応する時期に、2000年平均の172.2から05年の195.3へ、約13%上ったに過ぎない。以上の事実は、市場での金相場が事実上で金の度量単位の逆数を示すものとすれば、金が価値尺度としては機能していないことを示すのである。

以上のように、現代における一般的な貨幣制度である中央銀行紙幣制のあり方とその動態を観察・分析すると、貨幣（金）が商品の価値尺度であるとの理論は否定されるのである。それでは、紙幣制の下での商品の価値尺度は何であるのか？また、もともとは貨幣が価値尺度であったのに後にその機能が失われたと仮定すると、それはどの時点なのか？を明らかにする必要がある。

2. 貨幣成立の歴史と論理

(i) 物々交換の論理

ここであらためて、商品の生産と交換の発生と発展の歴史を簡単に振り返りつつ、その中で貨幣が出現する過程とその結果を論理化して示すことが必要である。このことを明確に示したものは、重大な欠陥を内蔵はしているが、マルクスのいわゆる価値形態論である。マルクスは価値形態論の課題を、「貨幣形態の発生を証明するということ、したがって、商品の価値関係に含まれている価値表現が、どうしてもっとも単純なもっとも目立たぬ態容から、そのきらきらした貨幣形態に発展していったかを追求するということである」⁶⁾と述べている。ここには、「もっとも単純なものから複雑なものへと上向していく抽象的な思考の歩みは、実際の歴史的過程に照応しているといえる」⁷⁾というマルクスの経済学方法論の適用が見られることはいうまでもない。

マルクスはその価値形態論を、もっとも単純な商品交換である2商品の直接交換すなわち物々交換の考察から始めている。そこで提示されるのが「単純な、個別的な、または偶然的

な価値形態」であり、それは以下の関係式で示される。

- ▽商品 A の x 量 = 商品 B の y 量 (例えば亜麻布 20 エレ = 上着 1 着) あるいは
 ▽ x 量の商品 A は y 量の商品 B に値する (20 エレの亜麻布は 1 着の上着に値する)。

上の関係式は、商品 A がこの量的比率で商品 B と交換される (交換された) という事実を表現しており、A の x 量の「交換価値」は B の y 量に等しい、あるいは、B の y 量は A の x 量の「等価物」であるという。もちろん、A (1 単位) の交換価値は B の (y/x) 量に等しいといっても同じである。ここで大事なことは、商品 A が持っている使用価値 (有用性あるいは効用) とは区別される交換価値が、商品 B という使用価値の数量で表現されていることである。逆に、商品 B の交換価値は商品 A の使用価値としての数量で表される。すなわち、A の交換価値の大きさを表す単位は、A とは別種の使用価値 B であるということである。この単位は、商品交換の発展のもっと後の段階で現れてくる「価格」のような商品共通の単位 (統一的な単位) ではないことをここで銘記すべきである。

ところがマルクスはここで、商品 A (例えば亜麻布) と B (上着) とが等置されていることは、「亜麻布と上着とが価値の大きさとしては、同一単位の表現であり、同一性質のものであるということを含んでいる」⁸⁾ と述べる。そしてマルクスは、現象形態である交換価値の本質としてここで独特の価値概念を導入し、「価値としては、商品は人間労働の単なる凝結物である」⁹⁾ として、いわゆる労働価値論を展開しているのである。なるほど商品及びサービスは労働の生産物または労働の支出そのもの (いずれも人手をかけるもの) であるといえるし、交換当事者は交換される商品にはなんらかの意味において“同じ価値がある”と考えるだろうが、労働の対象化したものが商品価値であり、その価値の大きさは労働時間の長さによって決まるということは、商品交換論のこの段階ではまだ論証されていない概念である。それにもまして注意すべきは、このような同一単位による価値の等置というとらえ方が、亜麻布の交換価値の単位は交換相手の上着という別種・特殊な使用価値であるというマルクス自身が強調している捉え方に矛盾していることである。共通の単位によって商品の交換価値が現実に表現されるのは、物々交換における 2 商品とは異なる、いわば第 3 者である一般的等価物そして貨幣が出現してからのことである。そこにまさに貨幣の役割があるのであって、簡単な価値形態の段階において 2 商品について共通単位での価値を語ることは、かえって貨幣と価格の意味を把握できない結果をもたらすであろう。

共通の単位についてのマルクスの誤解は、重量 (質量) についての彼のアナロジーに端的に示されている。すなわちマルクスは砂糖塊の重さを表す場合、「あらかじめ重量の定められている種々なる鉄片を取り出し」、これを「砂糖の重量尺度として」用いると述べている¹⁰⁾。この場合、砂糖も鉄もその重さを同じ重量単位 (例えばグラム) で表されるのであり、鉄片

貨幣は価値尺度ではない

の重量はわかっている（それ故に尺度として機能する）。そこでマルクスはいう、「鉄なる物体が、重量尺度として砂糖塊に対して、ただ重さだけを代表しているように、われわれの価値表現においては、上着体は、亜麻布に対して、ただ価値を代表するだけである」¹¹⁾と。

これを見ると、マルクスは上着も亜麻布もその「価値の単位」が同じであり、かつ、上着の価値の大きさもわかっていて亜麻布の価値の尺度として機能していると考えていることがわかる。だが、いったい価値の単位とはなにか。そして上着の価値の大きさとはいくらなのか。実は、そのような「価値の単位」も「その大きさ」も存在しない、すくなくとも存在を経験的に確認できないのである。マルクスは商品の価値の実体は人間の労働であり、労働の量は労働時間で計られるから、労働が対象化した価値の大きさも労働の量で計られると考えているようだ。だが、ここでいわれているように、価値は労働が対象化したものであって、労働と同じものではない。したがって、労働と同じく時間で計られるものとはいえない。マルクスは巧みにか、あるいは錯覚によってか、いつの間にか「労働＝価値」として論じている。当然ではあるが、マルクスによっても両者は異なるものである。では、労働が対象化されたとされる価値とはいったい何であり、その大きさの単位は何か。そもそも、そのようなものを定義はできないし、その単位や大きさを示すことは出来ない。すなわち、マルクスの価値概念は形而上的なものであって、経済学が経験科学である以上、導入してはいけないものである。

なお、マルクス自身も価値の大きさを具体的数量で示すことに躊躇を感じていたようである。そのためであろう、例えば、資本論第2巻第3編で再生産表式を論じた際、単純再生産の例における社会的総生産物の「総価値は9000」と単位なしで述べているが、他方で「数字は100万マルク、フラン、ポンドのいずれとを考えてもよい」¹²⁾との注釈を持ち出しているのである。

要するに、「簡単な価値形態」を例示する関係式においては、交換される2商品に「共通な価値単位」を読み取ることは不可能なのである。そこでは左辺の商品の交換価値が右辺の商品の使用価値の数量で示されるにとどまる。ただし、この関係式は、二つの商品の所有者がこの比率での交換に同意したことを表す便宜的な、あるいは擬似的な「式」でしかないが、マルクスはこれを「方程式」¹³⁾と誤って捉えたために、左右両辺は同じ単位でなければならないとして、価値形態論におけるマルクス自身の本来の論理を崩す結果を招来しているのである。

(ii) 貨幣成立の論理

「簡単な価値形態」は、商品交換のもっとも端緒的な段階である2商品の物々交換に照応しているのに対し、そのような物々交換がより広範囲に行われる商品交換のいっそう発展した段階を、マルクスは「総体的または拡大された価値形態」と論理化して、次のように例示

している。

▽商品 A の z 量 = 商品 B の u 量 または = 商品 C の v 量 または商品 D の w 量 または
商品 E の x 量 または = その他
(亜麻布 20 エレ = 上着 1 着 または = 茶 10 ポンド または = コーヒー 40 ポンド また
は = 小麦 1 クォーター または = 金 2 オンス または鉄 1 / 2 トン または = その他)

上記のような交換関係は、例えば商品 A の生産者の生産力が発展してより多くの A を生産し、より多くの商品 A を交換に供するようになったこと、そこで A の生産者は A と交換に、B に加えて C, D, E など複数種類の商品を手に入れられるようになったことを表している。すなわち、いまや商品 A の交換価値は B, C, D などの複数の種類の商品（その使用価値の数量）によって表されている。その逆に、商品 B, C, D などは、いずれも商品 A の等価物として同じ役割を演じている。したがって、商品 B, C, D などのそれぞれの量は、いずれも商品 A（の z 量）の交換価値の姿として、いまや等しい量を表しているといえる。だが、その等しいはずの量は、なんらかの共通単位によっては表示されない。それらは、あくまで、商品 B であり、商品 C その他である。

さて、商品 A の生産が増えてそのより多くが交換に供され、A が多くの異種商品と交換されるような段階になると、程度は異なるにせよ、商品 B も C, D, E などと交換されるようになるであろう。つまり、多数の商品が縦横交差的に交換されるようになる。そうになると、おのずともっとも頻繁に交換の対象となる商品が現れてくる。それは、例えば、多くの商品が亜麻布と交換されるようになるということであり、上で見た「総体的または拡大された価値形態」における関係が、下記のように逆に表されるようになるということを意味する。

上着 1 着	}	= 亜麻布 20 エレ
茶 10 ポンド		
コーヒー 40 ポンド		
小麦 1 クォーター		
金 2 オンス		
その他の商品の量		

この価値形態においては、上着などの多くの商品の交換価値が同じ亜麻布（という使用価値）によって、つまり共通の商品によって表現されている。このことは、左辺の諸商品が相互にも同一の量の交換価値を持つものであること、すなわち亜麻布という共通の一商品を単位とする同一量の交換価値として現れることを意味する。この価値形態をマルクスは一般的

貨幣は価値尺度ではない

価値形態と名付け、この形態において「初めて現実には、商品価値として相互に関係させ、またはこれらを相互に交換価値として現れさせるようになる」、そして「あらゆる商品が……量的に比較しうる価値の大きさとしても現れる」¹⁵⁾と述べている。

ここで、一般的価値形態において等価物の役割を演ずる商品（上の例では亜麻布）を一般的等価（あるいは一般的等価物）と呼ぶ。一般的等価物は事実上においては貨幣であるが、商品の交換・流通が十分に発展していない段階においては、そうした一般的等価の役割を演ずる商品は特定商品に固定されない。アダム・スミスは、未開社会においてはそのような端的な、事実上の貨幣（スミスは商業の共通用具と呼んでいる）は家畜だったと述べている¹⁶⁾。日本の場合には、そのような「物品貨幣」としては「稲米、布帛（ふはく）、獣皮、刀剣、勾玉（まがたま）、鏡、装身具などがあげられるが、とくに稲米・布帛が多く用いられた」¹⁷⁾。一般的等価物の中からやがて貨幣となる商品が出現する。貨幣となるのは、「本来一般的等価の社会的機能に適する商品、すなわち貴金属」¹⁸⁾とくに金・銀である。貴金属の貨幣素材としての特性には、耐久性があること、どの部分も質的に均一であること、任意に分割あるいは統合し得ること、少ない質量で諸商品の大きな交換価値を表し得ることなどがある。

こうして貨幣（以下では金とする）が出現すると、それ以外のすべての商品は、その交換価値がただひとつの商品すなわち金の量で（その質量の単位であるオンスやグラムで）表されるようになる。「このように、商品の交換価値が…特殊な一商品で…表現されたものが価格である」¹⁹⁾。いいかえれば、交換価値の貨幣形態が価格である。以上のように、すべての商品がはじめてその交換価値を同じ単位（金の一定質量）の大きさと表されるようになり、したがって相互に直接的に比較が可能となるのである。

次に、貨幣としての金には、その一定の質量を単位とする貨幣名（円、ドル、ポンドなど）が与えられる。このことは金を鑄貨（金貨）として鑄造することを契機として行われる。すなわち、金を貨幣として用いるためには、その品位の確認、その質量の正確な計量が欠かせないが、例えば金 1500 ミリグラム = 1 円のように、国家が品位と質量を保証して金貨（この例では 1 円金貨）を造れば、そうした必要を満たすことが出来るのである。こうして、金の質量によって表現される商品の価格は、いまや金の一定質量を単位（度量単位）とする貨幣の名称で（例えば〇〇円、〇〇ドルのように）表現されるようになる。すなわち、すべての商品は貨幣名での価格を得るわけである。このような価格の度量単位を分割して補助単位を定め、ひとつの度量体系としたものが価格の度量基準（度量標準）である。

(iii) 間接交換の論理

商品交換が発展して諸商品の中から貨幣が選出されるようになると、商品－商品（W－W）という直接交換（物々交換）は、商品－貨幣－商品（W－G－W）という間接交換に移行する。それは商品対商品の交換が販売（W－G）と購買（G－W）に分離することを意

味する。この場合、ある人（第 1 の人）の販売（ $W1 - G$ ）は第 2 の人にとっての購買（ $G - W1$ ）に他ならないこと、また第 2 の人はすでに彼の販売（ $W2 - G$ ）を終えていること、その第 2 の人の販売は第 3 の人にとっての購買（ $G - W2$ ）であること、第 3 の人はその前に販売（ $W3 - G$ ）を終えていること、第 1 の人は上の販売で得た貨幣で購買（ $G - W4$ ）を行うこと、その購買は第 4 の人の販売（ $W4 - G$ ）であること等々、を意味する。すなわち、いまや商品と商品との交換は、多数の商品の販売と購買の絡み合いの中で、つまり商品流通の中で行われるようになる。

貨幣の出現と商品交換の商品流通への発展、それとともに進行する販売と購買への商品交換の分離は、商品交換のあり方とその性格を一変させ、交換過程はまったく新しい様相を呈するにいたる。すなわち、①商品流通においては、「商品は価格のきめられた商品として交換過程にはいりこむ」²⁰⁾。これは、 $W1 - G - W2$ の交換における両極の商品いずれについてもいえることである。このことは、 $W1 - W2$ という物々交換においては、それぞれの商品の交換価値は相手商品の使用価値（異種の）において表現されるだけで、共通単位に基づいて各々の交換価値を表現、比較できないこと、したがって、交換に際しての二つの使用価値の数量の比率は両交換当事者の合意によってのみきまるとは決定的に異なる。②分業と生産力の発展の結果、各交換当事者（各商品生産者）はその生産数量を増やし、より多くの商品を販売して得た貨幣で数多くの種類の商品を買うようになる。こうして、下図に示すように、貨幣は商品の一般的購買手段となる。

$$W1 - G \left\{ \begin{array}{l} - W2 \\ - W3 \\ - W4 \\ - W5 \\ - W_x \end{array} \right.$$

③以上の結果、商品例えば $W1$ の所持者は、その販売に先立ち、やがて自ら購入するであろう諸商品の価格、すなわち上図でいえば $W2, W3, W4 \dots$ の価格の情報を持っているのであり、したがってそれらの商品の価格を考慮に入れて自らの商品の価格をきめるであろう。④すべての商品の価格は時間的に継承されるものだけということ。例えば商品 $W1$ の今日の価格（その大きさ）は昨日の価格を基準にきまる（変化する場合も）のである。この場合、価格の単位も継承されていることはいうまでもない。すなわち、各商品は日々その都度、いわば名無しで、あるいは裸の姿で交換過程（市場）に入り、そこで金との比較で初めて価格を得るわけでは絶対でない。そうではなく、商品の価格は、その単位も大きさも、日々継承され、再生産される歴史的存在である。したがって、個々の商品は交換過程に入る前に、そして金（貨幣商品）と比較されることなしに、その価格（少なくとも販売予定価格）がきまるのである。この事実、及び上に述べた③の事実を合わせると、商品の価格（貨幣表示での

貨幣は価値尺度ではない

交換価値)の尺度は、商品世界の全体に実存し歴史的に継承されているすべての商品の価格すなわち市場の価格表(物価体系)であることが明らかになる。

⑤間接交換においては、商品は、その販売(W - G)により、かならず貨幣に変わらなければならない。商品の貨幣への変態は商品価格の貨幣による「実現」²¹⁾といわれるが、こうして得られる“実現された貨幣”は、「ただ交換価値の担い手としてのみ実在」²²⁾する。それは商品の交換価値の自立した姿であり、一般的等価物として、あらゆる種類の商品の交換価値を表現する。そしてこの貨幣は、流通の次の段階(購買)では一般的購買手段として機能するわけである。商品の販売から購買へのこの過程を定式化すると次のようになる。

(ある商品) → (実現された貨幣) =

(一般的購買手段) → (他の任意の商品)

この場合に商品価格pが実現される貨幣の額は、(pそのものが商品の交換価値の貨幣名での表示であるから)額面でpの貨幣である。ここで、貨幣のPはなにを表すかであるが、すでに見てきたように、一方では販売された価格Pの商品はそれと交換されるべきすべての商品と等価であること、他方では金額Pの貨幣は一般的購買手段としては価格Pのすべての商品(使用価値)と等価であることから明らかなように、この貨幣額と同額のすべて商品(使用価値)の各々の数量の全系列で表される。これはすなわち貨幣そのものの交換価値である。つまり流通过程で機能する貨幣(流通手段)の交換価値は、それと交換される諸商品の量である、つまり、もろもろの商品を購買し得る力(購買力)である。

他方で、貨幣商品金は、まさにそれ自身が商品であるのだから、当然にその交換価値の価格形態を持つ。それが金の価格であり、市場の価格表(物価体系)の中に位置づけられる。価格の度量単位が定まっている場合には、その逆数が金の法定の固定価格になる。しかし、時の経過に伴い、生産力の発展や需要供給バランスの変動などによって市場の価格表が変化の中で、金の価格が固定されていると、金価格が総価格表に占める相対的地位が変化して、金生産が有利になったり不利になったりする結果が生ずる。その場合、是正策として、例えば金の度量単位を半分に切り下げたとしても、それは金の法定価格が2倍になるだけである。その結果、為替相場が下がってその影響がでるが、商品すべての価格が名目的に2倍になることはない。それが2倍になると考えるのは、つねに、その都度、商品の交換価値が金の量とその貨幣名によって評価され、決まるので、この金の量に付される貨幣名が変わればすべての商品の価格もそれに応じて変わるはずだ、と誤って理解するからである。実際には、貨幣単位あたりの金量が切り下げられても、物価体系はそれによってほとんど影響を受けないから、貨幣は額面通りに、すなわちその金額に等しい諸商品が実現された貨幣として、またそのような金額の諸商品の一般購買手段として通用し続けるであろう。

以上のことは、貨幣については、その素材の一商品としての交換価値(したがって価格)と、流通手段(通貨)としての交換価値の二つを区別すべきであることを示す。

3. 価値尺度論の誤り

それでは、いったい貨幣の価値尺度機能といわれるものとは何であったのだろうか？結論を先に述べると、もともと貨幣にはそのような価値尺度機能は無かったのである。

そもそも、商品の交換価値のような社会現象の大きさを測定することは、長さ、質量、時間などの自然現象の量を測定することとは根本的に異なっている。一般に、あるものの大きさを測る (measure) とは、「何か定まった基準の量を単位にとって、知ろうとする量がその何倍あるかを知ること」²³⁾ である。例えば物体の長さを計量するには、①長さの基本単位をメートルとする、②1メートルの長さを定義する物体 (基準) とその大きさを決定する、③メートル及びその補助単位を使って一般の物体を計るための物差しを作る、④長さを知ろうとする物体に物差しを当てて、その長さをメートル単位で知る、という手続きをとる。この②として何を使うかについては詳論を省略するが、最初は地球の子午線の4分の1の1000万分の1、次いで国際メートル原器、いまは光がある極小時間に真空中を伝わる行程の長さが基準として採用されている²⁴⁾。このような長さの測定について強調しておきたいことは、①この測定は、長さがわかっている物体 (物差し) を用いて他の物体の長さを測ることであること、つまり、長さでもって長さを測ることだということ、②物体の長さは、自然の物体であれ人工の物体であれ、物体自体に備わった客観的なものだという点である。

これに対して、商品の交換価値の貨幣形態・貨幣名での表現である価格に関しては、以下の点を認識すべきである。①商品の交換価値が表現されているのは、貨幣名が使われている場合でも、もともとは貨幣商品 (金) の質量 (オンス、グラムなど) によってであった。すなわち、ある商品 (貨幣商品) の質量によって他の商品の交換価値 (質量ではない) の大きさが表されている。これは、例えば長さでもって長さを測るという、一般的な計量あるいは測定概念とは異なることである。②仮に、貨幣商品の交換価値でもって一般商品の交換価値を測ることが可能であれば、貨幣はまさに交換価値の尺度であるといえるだろうが、貨幣素材の商品としての交換価値もそれと等価とされる他の一般商品 (使用価値) の数量によってのみ表されるのである。そもそも、他の商品との交換関係を離れて、商品 (貨幣商品を含む) それ自体に交換価値 (その量) が内在しているのではない。③それぞれの商品はその交換価値を貨幣商品の量で表すのであるが、すべての商品が同様の表示を行うので、商品相互の交換価値の比較が同一単位で行えるようになる。このことは、商品の直接交換の場合には、商品同士の等価性は交換される商品間のアナログの (analog, analogous, 相似の) 比較のみ行われていたのが、いまやそうした比較が商品の全体についてデジタルで (数字で) 行われるようになったことを意味する。すなわち、交換価値の価格形態の形成ということは、ただ1点、交換価値表現における共通単位の形成という点においてのみ意味を持つのである。

貨幣は価値尺度ではない

そしてそうした共通単位は、ひとたび形成されればそのまま歴史的に継承されるのである。④商品の価格については、元来その単位が何に基づいていたかという問題の他に、それぞれの商品価格の大きさがどのように決まるかという問題がある。この点は長さや質量の計量と決定的に異なる点である。物体の長さや質量は、それがどのように計量されるかに関わりなく、客観的に定まったものである。これに対して、商品の交換価値は、直接交換の場合でも間接交換の場合でも、最終的には交換当事者たちの評価と合意を得て決まるものであり、それ故にまた絶えず変動するものである。要するに、商品の交換価値は価格として貨幣名で表されるだけでなく、その大きさが流通過程で決められるのであり、その点でも商品価格の決定は物体の計量とは根本的に異なっている。そのような商品の価格の決定がただ一つの商品つまり貨幣商品との比較によって行われるのでは絶対でない。

ここで、マルクスの労働価値論の意味がいつそう明確になる。彼は変動する価格に対して、価格のいわば根底にある「本質」としての、変動しない、客観的に決まる「価値」という概念を導入し、その価値は商品の生産に必要な人間労働の量（労働時間によって測られる）によって客観的に決まるとした。そして、どの商品も（貨幣商品を含む）価値を持っており、したがって共通の質を持ったものであるから比較可能だと主張した。これは、マルクスが商品価値の尺度の問題を、誤って普通の物体の計測のアナロジーで説明しようとしたためにほかならない。もし、商品の価値の大きさが労働量によって決まるのであれば、価値の尺度は労働量だということになり、貨幣が価値尺度だと結論したマルクスの価値尺度論は無意味になってしまうのである。

マルクス自身もこの論理矛盾に気がついていたと思われる。そこで『経済学批判』では次のように述べて、労働価値論を優先し、商品の交換価値を通約する貨幣の機能を否定している－「労働時間が金と商品のあいだの尺度であり、かつ金はすべての商品が金ではかられるかぎりにおいてのみ価値の尺度となるにすぎないのだから、貨幣が諸商品を通約できるものになっているように見えるのは、流通過程の単なる仮象にほかならない」²⁵⁾。ところがマルクスは『資本論』においては、貨幣が持つ「通約」機能をつぎのように明確に述べている。すなわち、「金の第一の機能は、商品世界に対して、その価値表現の材料を提供し、または商品価値を同分母をもつ大いさ、すなわち質的に等一で量的に比較のできる大いさとして、表示することにある」²⁶⁾。その結果として生ずる彼の労働価値論と貨幣形態論との矛盾については、「価値尺度としての貨幣は、商品の内在的な価値尺度である労働時間の必然的な現象形態である」²⁷⁾という解釈（正当化）を呈示している。だが、繰り返し述べているように、そのような「内在的な価値尺度」の存在は論証されていないし、それが「現象」する仕方や論理も示されていないのである。

要するに、一般的等価物そして貨幣の成立は、諸商品の交換価値を共通の単位で表し、それを相互に比較することを可能にしたが、そしてそのことを明らかにしたのはマルクスの功

績であるが、そのことは貨幣が商品の価値尺度になったことを意味しない。そもそもマルクスが述べたような商品価値の「尺度」なるものは、彼がアナロジーとして用いた物体の尺度とはまったく異なるもの、つまり実は「尺度」ではないものである。

結局、貨幣はもともと、すなわちその成立以来、商品の価値尺度ではなかったのである。金貨流通あるいは各種の金本位制が消滅することによってはじめて貨幣が価値尺度でなくなったわけではない。ただ、現代の紙幣制の下では、貨幣を価値尺度と見なす理論の破綻が論証されやすくなった。私は紙幣制下の価値尺度論の矛盾を明らかにすることから出発したが、前回の論文において、「物物体系が商品の価値尺度になると、それまで価値尺度であった金などの貨幣商品は価値尺度としての役割を失う」¹⁾と述べ、貨幣成立時におけるその価値尺度機能を認めていたのであるが、それは誤りであった。また、同論文において商品「価値」という概念を厳密な検討抜きに使用した点も不適切であった。

4. 形而上的なワルラス交換価値論

ここで、価格概念の明確化と関連して、交換価値と価格について独自の理論を展開したレオン・ワルラスの所論を検討しておく。これは、ワルラスの交換価値と価格の理論には根本的な欠陥があるにもかかわらず、「ワルラス以後は、近代経済学の中心がワルラスの理論ということになっている」²⁸⁾からである。

ワルラスが取り組んだ課題は、交換価値と交換の理論を構築して、競争市場において諸商品の均衡価格はいかにして、またどのような値に決まるかを理論的に解明することである。すなわちワルラスによれば、力と速度の数学理論が応用力学に先行する純粋力学であるように、「交換価値と交換の理論」は応用経済学に先行すべき「純粋経済学」である²⁹⁾。そして交換の理論は、「今まで数学者が忘れていてまだ十分に研究されていなかった数学の一分科」だという³⁰⁾。

ワルラスは交換の理論を明らかにするため、『純粋経済学要論』において「第二編 二商品の間の交換の理論」から始めて「第三編 多数の商品の間の交換の理論」へ進むのであるが、そこで想定され、扱われるのは貨幣が介在しない商品の直接的交換すなわち物々交換の世界である。なぜなら、「交換に貨幣が介在するのは……交換の特殊な場合である。後に貨幣が介在する交換の研究を行うが、最初から、これを交換価値の一般的事実の研究と混同すべきではない」³¹⁾からであると。

そこで、マルクスと同じように、ワルラスもまず2商品の交換の考察から始める。「この2商品を燕麦および小麦と仮定してもよいし、また抽象的に (A), (B) と仮定してもよい。私は A, B を (A), (B) のように括弧で囲み、量を表す文字との混同を避けた。量を表す文字だけが方程式に組み入れられるものであり、括弧で囲んだものは、種別、類別あるいは哲学

貨幣は価値尺度ではない

的な用語を用いれば実体 (des essences) である。」³²⁾

ワルラスは続いて次のようにいう。「いまひとつの市場を想定し、そこに (A) を所有しながらその一部分を与えて (B) を得ようとする人々が一方から到着し、(B) を所有しその一部分を与えて (A) を得ようとする人々が他方から到着したとする。この場合にせりの基礎となるものが必要であるから、一人の仲買人が、たとえば前回の市場の引値に従って (A) の m 単位に対して (B) の n 単位を与えることを申し出たと想定しよう」と。そして「(A) で表した (B) の価格、(B) で表した (A) の価格を、それぞれ一般に P_b, P_a 」で表した上で、ワルラスはこの場合の「交換方程式」を提示する³³⁾。

なお、ここでワルラスが用いた「(A) で表した (B) の価格、(B) で表した (A) の価格」という価格の表し方は、マルクスの「単純な (あるいは簡単な) 価値形態」における交換価値の表現の仕方に類似しているが、後で見るようにまったく異なるものである。

ワルラスが示した「交換方程式」は次の通りである。

$$mv_a = nv_b$$

ここで、ワルラスは「 v_a を (A) の 1 単位の交換価値と呼び、 v_b を (B) 1 単位の交換価値と呼ぶ」³⁴⁾。次いで上式から

$$\begin{aligned} v_b / v_a &= P_b = m / n = \mu \\ v_a / v_b &= P_a = n / m = 1 / \mu \end{aligned}$$

さらにこの両式から

$$P_b = 1 / P_a, \quad P_a = 1 / P_b$$

を導いている³⁵⁾。

この「交換方程式」における最大の問題 (疑問点) は、 v_a と v_b という「交換価値」の突然の導入である。そもそも、この交換価値とはなにか。ワルラスは次のようにいっている – 「小麦市場を例にとり、ある与えられた時点で小麦 5 ヘクト^ワが 120 フランすなわち 90 % の銀 600 ^グと交換せられたとすれば、『小麦は 1 ヘクト^ワ 24 フランの価値がある』という。これが交換価値の事実である」と³⁶⁾。なお、ここでは、

$$\text{銀 } 600 \text{ ^グ } = 120 \text{ フラン, すなわち銀 } 5 \text{ ^グ } = 1 \text{ フラン}$$

と前提されている。これは、一般的には貨幣としての銀の度量単位を示すものである。したがって、ここでワルラスがいう交換価値とは、交換価値の貨幣形態、すなわち本来の価格だろうと考えるのが自然である。フランス語の d'argent が銀と貨幣両方の意味を持つだけにおさらそうである。もし、ワルラスがここでの麦の交換価値としてその貨幣表現である価格を用いているとすると、その瞬間にワルラス理論は崩壊するであろう。なぜなら、彼はここでは貨幣が介在しない交換を前提として議論をしているのだから。しかし、ワルラスの文章は一般にかなり曖昧だが、ここでは銀とは商品としての銀を意味しているようである。

交換価値についてのワルラスの考えの核心は次の点に示されている。すなわち、小麦 5 ヘ

クト_銀が 120 フランすなわち銀 600 _銀と交換される先の例について、①「小麦 1 ヘクト_銀の交換価値の 5 倍は銀 1 _銀の交換価値の 600 倍に等しい」と述べている点、また②「 v_b を小麦 1 ヘクト_銀の交換価値とし、 v_a を品位 9/10 の銀 1 _銀の交換価値とすれば、数学の通常の記号を用いて、方程式

$$5v_b = 600v_a$$

が得られる」と述べているところである³⁷⁾。

これは、それぞれの商品の 1 単位には固有の交換価値がいわば内在しているとの考えに立脚したものであり、②ではそのような 1 単位あたりの交換価値を記号化したものである。この単位あたりの交換価値 v_a 、 v_b は同一方程式内にあるものとして当然に単位が共通のものであるはずだが、その単位がいかなるものであり、またその大きさがどのように表されるかは説明されておらず、不明である。ワルラスは上の式に続けて、「それゆえ、交換価値は一つの大きさである」³⁸⁾と述べている。だが、そのような交換価値の中身と大きさが不明であることからいえば、 v_a と v_b は一種の未知数だといえるが、ここでは方程式は一つ、未知数は二つなので、この方程式は解けない。だから、それらはいわば不可知数である。このように、ワルラスの交換価値の概念はやはり説明不能な、というより説明抜きの超越的、形而上的概念であり、その点でマルクスの「価値」(交換価値の本質)とその実体としての労働量という概念と同性質のものであることが興味深い。もちろん、そのような概念に妥当性がないことはいうまでもない。

とにかく、ワルラスはこうした諮意的な概念を使って、上記のような

$$mv_a = nv_b$$

という交換方程式なるものと、その演算結果を示した。その結果は、

$$v_b / v_a = Pb = m / n = \mu$$

という比率の提示である。そこで、この比率についての解釈が示される。すなわち、「交換価値の比すなわち相対的交換価値を価格と呼ぶ」³⁹⁾と。これはまことに珍妙な価格概念である。つまり、1 商品の「価格」とは交換相手の商品の量ではなく、交換される 2 商品の「交換価値」の比であるとの新定義がここで突然に持ち込まれるのである(二重定義)。だが実際には、例えば前出の

$$\text{小麦 5 ヘクト}_{銀} = \text{銀 600}_{銀}$$

という交換においては、小麦(商品 A) 1 ヘクト_銀の価格(P_a)は銀(商品 B)で表して 120 _銀である、ということが示されていた。この場合、小麦の「価格」にとっては「銀で表して」というのが不可欠の条件であるが、いまやワルラスの新定義による「価格」の $P_a = n / m$ においては、この不可欠の条件が消されて、単なる「比」(数)だけが示されるのである。

もともと物々交換の関係は、ワルラスが用いた例を使うと、

貨幣は価値尺度ではない

$$(A) \times m = (B) \times n$$

として示されるべきものである。そして、(A) も (B) も「量を表す文字」ではないから、本来の方程式には組み込めないものである。だから、上の等式は本来の方程式ではなく、二つの商品の等置と交換（それについての交換当事者の合意）を示す便宜的なものである。だから、(A) の1単位については、

$$(A) = (B) \times n / m$$

と (B) を含めて表さなければならず、右辺から (B) を消し去り、単に n / m とだけ記すことはできない。また、(B) を左辺に移して $(A) / (B)$ としても、それは無意味な「比」である。むしろ、ワルラスがその「交換方程式」に v_a , v_b というようないわば不可知数を「交換価値」として持ち込んだのは、物々交換における交換価値のあるべきかたちでの表示から、等価形態（右辺）にある商品、すなわち数量的に処理できないものの存在を意図的に消すための手品的な操作であったと推定できる。というのは、そうしなければ、ワルラスが考える商品交換における「均衡価格」を数学的に導くことはできないからである。

逆にいうと、そのような不可欠の条件を消去した上で行った演算やその結果は無意味である。例えばワルラスは、その交換方程式から導いた結論、

$$v_b / v_a = P_b = m / n = \mu$$

などをもとに、「価格すなわち交換価値の比は交換せられる商品の量の反比に等しい。各商品の価格は互いに逆数である。……この恒久的な逆数関係は、交換の事実において注意すべきもっとも重要な事柄である」⁴⁰⁾と述べている。だが、

$$(A) \times m = (B) \times n$$

という物々交換においては、

$$(A) = (B) \times n / m, (B) = (A) \times m / n$$

であるから、ワルラス流に右辺から (B) や (A) を消し去れば、数量比だけが残る。それを根拠に比、反比、逆数などを云々するのは同義反復に近い。まして、「恒久的な逆数関係は、交換の事実において注意すべきもっとも重要な事柄である」などという言葉は、まったくのナンセンスである。

ワルラスがさらに進んで行った「多数の商品の間の交換の理論」などについては、別の機会に検討することにした。

注

- 1) 富塚文太郎「貨幣は価値尺度か」、『東京経学会誌』253号(2007)所収
- 2) 三宅義夫『金』(岩波新書, 1968年), p.3
- 3) 富塚文太郎『ドル体制の矛盾と帰結』(読売新聞社, 1990年), 第2章2「固定為替相場制と交換性」
- 4) ロバート・トリフィン『金とドルの危機』, 村野孝・小島清監訳(勁草書房1961年)

- 5) 岡橋保『貨幣論』増補新版(春秋社, 1957年) p.272
- 6) マルクス『資本論』向坂逸郎訳(岩波文庫, 1969年), (一) p.89
- 7) 同『経済学批判』武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳(岩波文庫 1956年) p.315
- 8) 『資本論』, 同前 p.93
- 9) 同前 p.94
- 10) 同前 p.105
- 11) 同前 p.106
- 12) 同前 (五) p.80, 81
- 13) 同前 (一) p.71
- 14) 同前 p.115
- 15) 同前 p.121
- 16) アダム・スミス『国富論』水田洋監訳・杉山忠平訳(岩波文庫, 2000年), (一) p.52
- 17) 山口和雄『貨幣の語る日本の歴史』(そしえて文庫 1979年) p.12
- 18) 『資本論』, 同前 (一) p.160
- 19) 『経済学批判』同前 p.77
- 20) 『経済学批判』同前 p.107
- 21) 同前 p.113
- 22) 同前 p.111
- 23) 小泉袈裟勝『度量衡の歴史』(原書房 1977年) p.2
- 24) 同前 p.224232
- 25) 『経済学批判』同前 p.79
- 26) 『資本論』, 同前 (一) p.168
- 27) 同前
- 28) 根岸隆『ワルラス経済学入門-純粹経済学要論を読む』(岩波セミナーブックス, 1985年) p.7
- 29) レオン・ワルラス『純粹経済学要論-社会的富の理論-』久武雅夫訳(岩波書店 1983年) p.29
原書は第4版(1900年, 初版は2分冊で1874, 77年)
- 30) 同前
- 31) 同前 p.48
- 32) 同前
- 33) 同前
- 34) 同前
- 35) 同前 p.49
- 36) 同前 p.26
- 37) 同前 p.28
- 38) 同前 p.29
- 39) 同前 p.48
- 40) 同前 p.49